

事故防止に向けた安全対策 【ハンドボール】

1 競技特性

(1) 実技指導書等を参考に、競技の特性や特徴を記載する

ハンドボールは、「走る・跳ぶ・投げる」という基本的な運動形態で構成される。攻防のあるスポーツであるため運動能力と敏捷性が要求され、運動能力全般を高めるのに適している。比較的ルールが簡単なため誰でもゲームに熱中できる。ボールを持っての移動が3歩まで許されるので、ゲームはスピーディでスリリングに展開され、時には激しくぶつかり合うこともあるため、エキサイティングなゲーム展開となる特性を有している。サイド側のラインが40m、ゴール側のラインが20mの長さの比較的広いコートの中で、スピード感あふれる動きと、攻防における相手とのコンタクトの中で、ジャンプしたりカットインしたりクロスプレーからの展開で相手ゴールにシュートし得点を競い合うスポーツである。

(2) 競技特性に応じた事故の特徴を記載する

激しくぶつかり合うスポーツのため、転倒し頭部を床に打つ、シュート性のボールが顔面に当たり目を損傷する等のけがが多い。また、スピーディな展開を多く要するスポーツのため、関節の靭帯損傷なども事故として多い。

(3) 過去の重大事故例等を記載する

ハンドボールゴールが固定されずに活動していたため、ゴールポストにぶら下がる行為や、風等の影響により、頭部に当たり死亡する事例が発生している。

2 想定される事事故例と予防策

(1) 主として【施設・設備・用具】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
<ul style="list-style-type: none">・外コートのゴールにぶら下がり倒れて下敷きになる・ベンチや得点版の設置は安全が確保されていない・ボールがコート内に散乱している・ほこり、汗や飲み物によって床が滑りやすくなっている・他の部活動と校庭や体育館を共有する際、ボールが活動範囲より外に飛んだり、転がったりしている・隣のコート（他競技）との距離が近く対人接触が起こる可能性がある	<ul style="list-style-type: none">・骨折、脳震盪・打撲、骨折・捻挫・捻挫・脳震盪、捻挫・脳震盪、打撲	<ul style="list-style-type: none">・ゴールの固定、運搬は3人以上で運ぶ・コートから離れた適切な距離に設置する・ボールを拾う生徒の配置、ボールケースへの収納、声掛け・プレーを止め、モップ、雑巾等で拭く・防球ネットの設置、声掛け・安全な距離の確保

(2) 主として【活動内容】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
<ul style="list-style-type: none"> ・速攻練習時の接触事故 ・装身具（ネックレス、ヘアピン）をつけて活動している ・爪が長い ・急激な動きによる筋や腱の損傷 ・フットワーク時のけが ・休憩のない活動時間 ・不注意による人体の衝突 ・複数箇所からシュート練習による、ゴールキーパーへの直撃 ・ディフェンス側がシュートブロックの際に、顔面にボールが当たる ・シュート体制に入ったところをディフェンスと接触し、バランスを崩して腰から落ちた 	<ul style="list-style-type: none"> ・脳震盪、打撲 ・擦過傷 ・爪の剥離、相手への擦過傷 ・肉離れ、アキレス腱断裂 ・足首、膝の炎症、捻挫 ・熱中症 ・打撲、骨折、内臓破裂 ・打撲、骨折、眼球の損傷 ・眼球の負傷 	<ul style="list-style-type: none"> ・一方通行または前の人から終わってから開始する ・活動前に確認する ・活動前に確認する ・十分なウォーミングアップ、普段のトレーニング方法の見直し ・過度の練習により疲労感を貯めない ・適度な休息と水分補給を行う ・約束事の徹底。コンタクト時には後方、側方からつかむ、押すなどの危険な行為は行わない。 ・シュートの順番を決め一人ずつ行う ・ブロックをかわしてシュートをするなどの技術を習得する。

(3) 主として【環境条件等】が要因となって起こる事故

想定される事故やけがの原因（事例）	傷害例	予防策
<p>(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高温多湿の環境下や長時間にわたる練習による熱中症 ・ ・ 	熱失神、熱疲労、熱けいれん、熱射病	<ul style="list-style-type: none"> ・環境状況に応じた運動、休憩、水分補給等の計画を立てる ・冷房が使用可能な施設においては積極的に使用する ・効率的な換気を行う